

## メッセージアウトライン ルカの福音書1:5～38「ザカリヤとマリア」

[5-10] 「ユダヤの王ヘロデの時代に、アビヤの組でザカリヤという名の祭司がいた。彼の妻はアロンの子孫で、名をエリサベツといった。二人とも神の前に正しい人で、主のすべての命令と掟を落ち度なく行っていた。しかし、彼らには子がいなかった。エリサベツが不妊だったからである。また、二人ともすでに年をとっていた。さてザカリヤは、自分の組が当番で、神の前で祭司の務めをしていたとき、祭司の慣習によってくじを引いたところ、主の神殿に入って香をたくことになった。彼が香をたく間、外では大勢の民がみな祈っていた」

時は今から約二千年前。ヘロデという王は聖書に何人も出てくるが、ここに登場してくるヘロデはヘロデ大王と呼ばれ、ユダヤにおいて絶大な権力を持っていた。彼はユダヤ人の血統ではなくイドマヤ人(エドム人)で、後に出てくるヘロデは彼の子、孫、ひ孫である。彼は猜疑心に富み、生前に自分の妻や子を何人も殺している。自分の地位を脅かす恐れのある者は躊躇なく抹殺したのである。そのような時代に神はご自分の計画を実現に移される。祭司職に就く者はあの出エジプトの指導者モーセの兄アロンの子孫でなければならず、「アビヤの組」とは神殿で奉仕する祭司二十四組のうち第八組であった。→ I 歴代誌24:10 ザカリヤはその組に属しており、くじによって神殿に入って香をたくことになった。彼の妻はエリサベツといい、彼らは主のすべての命令と掟すなわち律法を落ち度なく行い、正しい生活を送っていた。しかし、この二人はもう年をとっており、しかもエリサベツは不妊の女性で彼らには子がなかった。二人の長年の祈りの課題は子どもが与えられることであった。ザカリヤが神殿に入って香をたく奉仕をしている間、多くのユダヤの民は外で祈っていた。

[11-14] 神殿で香をたいていたザカリヤの前に突然、主の使い(天使)が現れて香の祭壇の右に立った。(11)この御使いは19節よりガブリエルという名であることがわかる。この御使いは旧約のダニエル書8:15以下にも登場している。その時代はBC6世紀である。ザカリヤはこの御使いを見て恐れたが、御使いはザカリヤに恐れることはありませんと言い、そして、彼の願いが聞かれたこと、彼の妻エリサベツは男の子を産むこと、その名をヨハネ(主はいつくしみ深い)とつけること、その子は彼にとって、あふれるばかりの喜びとなり、多くの人もその誕生を喜ぶことを告げた。(12~14)

[15-17] またこの子は主の御前に大いなる者となり、ぶどう酒や強い酒を決して飲まず、母の胎にいるときから聖霊に満たされ、イスラエルの人々の多くを彼らの神である主に立ち返らせること、さらに彼はエリヤの霊と力で、主に先立って歩み、父たちの心を子どもたちに向けさせ、不従順な者たちを義人の思いに立ち

返らせ、主のために整えられた民を用意するようになることも告げた。エリヤはBC9世紀にイスラエルを偶像礼拝の罪から主に立ち返らせるために活躍した預言者。そして旧約最後のマラキ書4:5~6には主が来られる前に再びエリヤが遣わされ、主に打ち滅ぼされないために人々の心を整えると預言されているが、この預言がまさにこのヨハネにおいて実現するのである。マラキはBC5世紀の預言者。彼以降、バプテスマのヨハネ、すなわちザカリヤとエリサベツの子ヨハネまで預言者は現れない。

[18-23]「私はそのようなことを、何によって知ることができるでしょうか。この私は年寄りですし、妻ももう年をとっています」(18)

ザカリヤは自分の年齢、妻の年齢、そして妻が不妊であること、こういった現実や現状を通してものを見た。つまり、理屈や常識で考えたのである。彼は神に仕える祭司であった。聖書もよく知っており、彼らの先祖アブラハムの妻サラが高齢(90歳)であったにもかかわらず、神の約束によりイサクを産んだことを知っていたはずである。ザカリヤの場合も今、主の使いが現れて彼の妻が男の子を産むとの約束を告げている。しかし、彼はそのことを素直に信じられず、「何によって知ることができるでしょうか」とするしを求めたのである。その結果、彼は子どもが生まれるまで、口がきけなくなり、話せなくなってしまふ。(19~23)

[24-25] そして主の使いのことばのとおり確かにエリサベツは身ごもった。彼女はこの出来事に対して、「主は今このようにして私に目を留め、人々の間から私の恥を取り除いてくれました」と告白した。彼女はとともうれしかったことであろう。もちろんこれは夫ザカリヤとの間の正常な夫婦関係による妊娠である。しかし、そこに神の超自然的な力が働いたのである。

[26-27]「さて、その六か月目に、御使いガブリエルが神から遣わされて。ガリラヤのナザレという町の一人の処女のところに来た。この処女は、ダビデの家系のヨセフという人のいいなずけで、名をマリアといった」

「ガリラヤのナザレ」イスラエルの北部、ガリラヤ湖から西へ約20キロメートルのところにある田舎町。エルサレムからは北へ約120キロメートルのところ。彼女の名はマリアと言い、ダビデの家系のヨセフという人のいいなずけであった。

「処女」ということばが26,27節で二度繰り返されているのは、彼女が独身で、男と性的な関係を持つようなふしだらな女ではないことを示している。彼女はどこにでもいるような普通の女性であったように思われる。

[28-29]「御使いは入って来ると、マリアに言った。『おめでとう。恵まれた方。主があなたとともにおられます。』しかし、マリアはこのことばにひどく戸惑って、これはいったい何のあいさつかと考え込んだ」

マリアは御使いが現れたこと、御使いを見たこと、それだけで驚きであっただろう。それだけではなく御使いが彼女に語りかけたことばを聞いて、ますます戸

惑い、恐れ、考え込んだのであった。

[30-33] 御使いが彼女に伝えたメッセージの内容

① 恐れることはありません、マリア。あなたは神から恵みを受けたのです。

②あなたは身ごもって、男の子を産みます。

③その名をイエスとつけなさい。「イエス」とは旧約のヘブル語「ヨシュア」のギリシア語訳で「主は救い」という意味。

④その子は大いなる者となり、いと高き方の子と呼ばれます。「いと高き方」とは神のこと。

⑤神である主は、彼にその父ダビデの王位をお与えになります。

⑥彼はとこしえにヤコブの家を治め、その支配に終わりはありません。

「ヤコブの家」とは単なる国家としてのイスラエルではなく、イスラエルの祖先アブラハム同様、信仰によって神に義とされた者の集まりである霊的イスラエルのことであり、教会のこと。

この世の国は栄枯盛衰するが、彼の支配する国は永遠に続き、終わることはないのである。

御使いの告げたメッセージを要約すれば、マリアは神から恵みを受け、彼女によって生まれる男の子イエスこそ神の子であり、人々が世々に渡って待ち望んでいたイスラエルの救い主となること、しかもその国は永遠に続く国であるというものであった。

[34] 「マリアは言った。『どうしてそのようなことが起こるのでしょうか。私は男の人を知りませんのに』」

彼女はヨセフのいいなずけであって、まだ結婚生活に入っていない。まして他の男とふしだらなことなどしていない。だから子どもが産まれるようなことは起こるはずがないと思ったのである。

[35] 「御使いは彼女に答えた。『聖霊があなたの上に臨み、いと高き方の力があなたをおおいます。それゆえ、生まれる子は聖なる者、神の子と呼ばれます』」

「聖霊」は「いと高き方」つまり神であるということ。その神の全能の力によってマリアに言われたことが可能になる。それゆえ、生まれる子は「聖なる者」（これは罪のない者という意味）「神の子」と呼ばれる。

普通の夫婦関係によって生まれる子はアダム以来の罪(原罪)を受け継いで生まれてくる。それゆえ、すべての人間はみな、神の前に罪ある者であり、神のさばきを受けるべき存在なのである。

→ローマ3:9,23 そのため、罪ある者が罪ある者の身代わりとなってその罪を贖うことはできない。それゆえ、罪のない聖なる神であるお方が処女マリアの胎に宿られ、救い主としてこの世に来られたのである。

[36] 御使いは彼女の親類のエリサベツの例をあげる。「見なさい。あなたの親類

のエリサベツ、あの人もあの年になって男の子を宿しています。不妊と言われていた人なのに、今はもう六か月です」ここでマリアとエリサベツは親戚関係にあるということもわかる。

[37]「神にとって不可能なことは何もしません」

人間にとって不可能に思えることでも、全知全能の神にとって不可能なことは何もないのである。私たちはこのことをよく覚えて、さまざまな問題に直面した時も、無理だと思ったり、失望してしまわないようにしたい。もちろん不完全な私たちの思いや願いがそのまま実現しないことはある。しかし、神のみこころならば必ずなるのである。

[38]「マリアは言った。『ご覧ください。私は主のはしためです。どうぞ、あなたのおことばどおり、この身になりますように。』すると、御使いは彼女から去って行った」

マリアは御使いのことばを素直に信じ受け入れた。この彼女の素直な信仰が、救い主がこの世に来られることを実現させたのである。疑り深い人は彼女の信仰を笑うかもしれない。しかし、彼女は自分にできる最善の決断をしたのである。そしてその結果は、素晴らしい祝福をこの世界にもたらすこととなった。

このマリアとザカリヤを比べてみると色々なことが教えられる。ザカリヤは神に仕える祭司でありながら、しかも御使いが現れて神の約束を告げているのに、素直に信じなかった。常識や理屈で判断し、疑い、そして「私はそのようなことを、何によって知ることができるのでしょうか」とするしを求めた。長年神に仕え、神を礼拝しているのに、いつの間にか常識やこの世的判断を優先して、素直に信じようとしない。このザカリヤの姿に私たちの姿が重なるということはないだろうか。信仰を持っている。神を礼拝している。毎週教会に来ていながら、いつの間にか自分の判断や経験を優先して、神を常識の世界に閉じ込めてしまっているということはないだろうか。不信仰は神の働く機会をなくしてしまう。→マタイ13:58

私たちはたくさんの聖書知識、神学的知識、そして人生経験や常識に富んでいても、それが信仰による神への従順となっていかなければ大変残念なことである。

しかし、私たちはたとえ神学的、聖書的に豊富な知識はなくても、語られたみことば、伝えられたメッセージを信仰をもって受け取り、素直に信じ従うことができるのではないだろうか。

私たちもマリアのように素直に主のみことばに従い、豊かな祝福をいただき、主の救いの働きのために用いられるものとなりたい。

→ヤコブ2:5、Iコリント1:26~28